

左脳に「文法中枢」

脳には、外国語上達のカギ

となる「文法中枢」があることを、酒井邦嘉・東京大助教授（言語脳科学）の研究グループが発見した。この成果を生かせば効率よく外国語の会話をマスターする方法の開発に役立つ、という。近く、米専門誌「大脳皮質」に掲載される。

研究グループは、東京都内の中学1年生120人に、120種類の動詞の過去形を2カ月間、集中的に学ばせた。このうち7組の双子を対象に、過去形についてのテストを実施。「機能的MRI（磁気共鳴画像化装置）」を使い、

脳の働きの変化を調べた。

その結果、トレーニング開始前のテスト（100点満点）ではほぼ全員が零点だったが、トレーニング後は20〜80点に上昇。点数に比例して左脳の前頭前野（こめかみ付近）の働きが活発になることが分かった。また、双子の成績向上率はほぼ同じで、語学の習得に遺伝的な要素がかかわることが示唆された。

外国語マスターのカギ

酒井さんは「言語の種類を問わず、滑らかに話すには特定の部位が働くようだ。語学教育の検証や効率よい学習法の開発に役立てたい」と話す。

研究グループ
大東大

テスト中、こめかみピクピク!?